

# 東京大学理学部

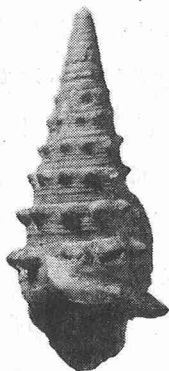
# 広報

— 7 卷 7 号 —

昭和50年10月

## 目 次

今年もまたさわやかなニュース	植村泰忠 …… (2)
イスラエルに旅して	大木道則 …… (3)
天山北路の町アルマアタ	大西孝治 …… (4)
第12回国際植物学会に出席して	大橋広好 …… (6)
第13回太平洋学術会議に出席して	米倉伸之 …… (7)
いけばなの歴史	青山惇彦 …… (8)
私の読んだ本 (23)	和田昭允 …… (10)
「研究人間—創造的科学技术への道—」	
「続研究人間—科学技術者の創造性を生かす道—」	
<学部消息>	(11~17)



*Vicarya callosa japonica* YABE & HATAI  
広島県庄原市新築町産 (×0.7)

今から約1500万年ほど前、日本列島は広く暖海に被われ、現在日本の近海には見られない熱帯系の生物が生息していた。この塔型の巻貝はピカリアとよばれ、この時期（第三紀中新世中期）に日本列島まで侵入してきた熱帯系動物群の中では最も有名で、化石コレクターたちの間では目玉商品として大切に扱われている。

この貝を含む地層の性質と一緒に発見される他の化石などからみて、この大きな巻貝は、奥深い入江のマングロープの茂る干潟に生息していたものと考えられている。今までに知られている分布の北限は、北海道南西部の日本海に浮ぶ奥尻島で、当時の黒潮は北海道中部までは確実に達しており、その付近に現在銚子沖にみられるような寒流・暖流のぶつかる潮目があった。この太いトゲをもった巻貝は、日本列島のたどった変転きわまりない歴史の一コマの証言者として、いま私の部屋の片すみに転っている。  
(地質：鎮西清高)

## 今年もまたさわやかなニュース

学部長 植 村 泰 忠

10月21日の夕方、出先から帰宅して夕刊をみると、本年の文化の日には江橋節郎先生が文化勲章をお受けになることになった旨の記事があり、今年もまた漸く深まりゆく秋の風がさわやかなニュースを運んで来たものと嬉しい想いにふけているところへ早速小堀さんから電話が入り、近刊の広報にまにあわせて至急一筆せよとのこと、とりあえずお祝いの言葉を記す次第となりました。

先生の筋収縮と弛緩に関する御研究が高い評価を受けて居られることは、生物物理関係の方からかねがね承って居りましたので、先生がこの栄誉を担はれる日のあろうことは私も期待して居りました。

先生の研究者としての優れた御資質と、たえざる日常の御精進とを知るものにとって、このことは当然とも申せましょう。

しかし本日のニュースは、私共理学部の教職員院生学生にとっては、やはり新鮮でほんとうにさわやかな嬉しいニュースでありまして、この私共の明るい心を代表させていただき、先生に“おめでとうございます”と慶祝の意を表したいと存じます。

数年前、物理学教室における生物物理学の今後の発展を考えて、江橋先生には是非お力添えを戴こうという希望を快よくおうけいたゞいて、先生を併任教授として理学部にお迎えできたことは私共の大きな喜びでございました。その結果現在物理学教室には生物物理の新しい芽がその研究教育活動に於いて着実に育ちつゝあります。世に謂う学部への壁の厚さとか、学部間協力の難かしさとかは、先生の深い御学殖と、そのお人柄と、研究一筋の御日常の前には影りすきものにすらみえるように感じます。先生の御壮健と一層の御活躍をお祈りする次第です。

(10月21日夜記す)

# イスラエルに旅して

大 木 道 則 (化学)

1975年7月、IUPACの第25回コンGRESSが、イスラエル国エルサレム市で開催された。筆者は、第26回コンGRESSが1977年に日本で開催されるための準備を進めている者の一人として、このコンGRESSに出席して、次回への招待の辞を述べるために、イスラエルに向かった。イスラエルといえば、あまり日本人が行かないということで、広報委員から、何か書けとのおおせである。たしかに、エルサレムでもテルアビブでも、またハイファでも、街では一人として日本人を見なかったが、アテネの空港についたとたんにたくさんの日本人を見かけ、日本語も聞えるという状態になったのであるから、イスラエルは、日本にとっては遠い国ということになるのであろう。

さて、何を書こうかと思いなやんだあげく、化学のかたい話を書いてもしかたあないし、観光記が書けるほど観光をしまわったわけでもないから、イスラエルに旅して、もっとも強烈な印象として残ったことを、理学部の皆さんにお伝えしようと考えてるに至った。印象に残ったというのは、入国のむずかしさではない。たしかに、イランやアメリカからイスラエル航空にのってイスラエルへ入った人は、大変な安全チェックを受けたい。カメラの中を見せたり、シャープペンシルの中まで調べられたという話も聞いた。しかし、筆者は、アテネからTWA機でイスラエルに入ったので、そのような経験は全然なかった。ここでとりあげようとしているのは、ユダヤ人達の精神面である。

アテネからテルアビブに向かうTWA機はほぼ満員であった。筆者の座席の隣も、アメリカから夏休みを利用して親戚をたずねていくという、大学生とおぼしき女性が二人座っていた。彼女等と交わした会話は、おおよそ月なみなものであった。しかし、乗機がテルアビブ空港に無事着陸すると、座席のあちこちから急に拍手がおこりだした。何事かと思って見ると、筆者の隣のお嬢さん達も手をたたいているではないか。その原因について、彼女等とあまりくわしく話をしたわけではない。しかし、彼女等の話のはしばしから、今ようやく母なる国に帰って来たという気持ちがうかがえた。考えてみると、その飛

行機にのっていた人は、ほんの数人を除いて、全てユダヤ系のアメリカ人だったのである。もちろん、日本人は祖国を追い出されて他国で冷たい仕打ちを受けたという経験をもっていないから、彼等の本当の気持ちが筆者にわかるというわけではないが、そのような民族が、いかに祖先の住みついた土地を大事にするものかということをかき問いたような気がするのである。同じことは、パレスチナの人達にもあるに違いない。パレスチナ問題の根深さと困難さを、もう一度思い知らされた思いがしたものである。

ユダヤ人が、いかにイスラエルという国を愛しているかは、今でも毎年何万という人達がアメリカから移民としてきているという事実でも知ることができる。実際、アメリカからイスラエルに移住したとしても、生活が向上する保証は何もない。むしろ、戦争などによる身の危険性は、イスラエルの方が大きいであろう。それにも拘らず、彼等はそこが祖国と思い定めて、そこをよくするために移っていくのである。このことは、観光バスのガイドが言った、そこが住みやすいからでなく、そこに住まねばならないからそこにキブツをつくるという一言からも明かであろう。

われわれ日本人は、国という意識が、今非常に希薄になっている(筆者が自然科学者という意味で特にそうかも知れない)から、彼等の愛国心を本当に理解することは困難かも知れない。彼等に言わせると、イスラエルは小さな国だから、自動車で走れば3時間もたえないうちに、西の海岸から東の国境まで行ってしまふ。したがって、外国からの侵攻に見えるためには、国民皆が銃をとって国を守るのはあたりまえだという。実際、よく知られているように、イスラエルでは、青年が18才に達すると全て兵役につき、男子は3年、女子は2年の勤務をする。学問は、その兵役が終ってからするのである。筆者は、いくつかの大学で、この徴兵制はイスラエルの学問レベルにとってマイナスではないかと質問した。答はいろいろであったが、しかたがないという人よりも、その方が学問をする際の身の入れ方がよくなるからよいのだという人が多かったのは印象的であった。考えてみれば、イスラエルは戦争中の国なのだ

から、これはあたりまえのことであろう。実際、筆者がでかける1日前にも、エルサレム市の中心街が爆破されたことが日本の新聞にも報じられたし、行って見た現場は、まだものままであった。また、筆者が滞在した2週中のある1日には、ヨルダンからロケット砲弾が1発とんできた。幸い誤射であることがわかり、犠牲者もでなかったけれど、たしかに、国というものの存在をいやというほど知らされた2週間であった。

イスラエルへの旅で、もう一つぜひ述べておかねばならないのは、宗教のことである。この点も日本人は、特に筆者は、無関心であるから、ずい分と奇異の感にうたれたことがある。ユダヤ教の信者にとっては、金曜の夜から土曜にかけてが聖なる日で、休日となることはよく知られているが、ユダヤ教の信者達は、どの宗教の信者たちよりも敬けんのではないかと思った。例えば、エルサレム市の旧市内の嘆きの壁では、いつ行ってみても祈る人の絶えることがない。そして、われわれ観光者もユダヤ教の聖地に入るときには、頭をかかすための帽子をわた

されるが、25回のIUPAC会議にでていたユダヤ人のおそらく半数以上が、その帽子をいつもつけているのである。筆者は外国人ということで特に免除されたいが、ある大学では、食事をするときには必ずその帽子をつけてお祈りをしてからにするという。しかし、このような宗教熱心さは、別にユダヤ人だけではないようである。回教徒が、太陽が出たり沈んだりするときには、どこにいてもお祈りをはじめるとは聞いていたが、今回は筆者の前の席にいたアラブ人が、飛行機の座席の上でお祈りをするのでくわした。はじめは何がはじまったのかわからなかったが、そのうち、その動きは祈りであることがわかった。そして、彼は、ベルト着用から禁煙のサインがでて祈りをやめようとせず、スチュワデスを困らせていた。

思えばいろいろな経験をした2週間であったが、中東の問題を日本人が理解するためには、民族、宗教など、いろいろと勉強しなければならないことが多いというのが結論である。

## 天山北路の町アルマアタ

大西孝治 (化学)

七月初旬、第3回日ソ触媒セミナーがソ連アルマアタ(Alma-Ata)で開催され、日本側の一員として参加する機会を得た。アルマアタを訪問した最初の日本の科学者だと云うことで、又ソ連科学アカデミーの招待であったこともあって大いに歓待され楽しい旅行であった。

日ソ触媒セミナーは、1971年の第1回はノボシビルスクで、第2回は1973年に東京で開催され、今回はソ連側で行われることになっていた。アルマアタで開かれると聞いて、先ず地図を調べてみた。ソ連のアジア地方の西南部に位置するカザフ共和国(最近この国のバイコヌールよりソユーズが打上げられた)は東は中国に、西はカスピ海に接し、ソ連全土の約八分の一を占める大共和国である。その首都が人口83万人のアルマアタである。市は、北にバルハッ湖、南にイシク・クル湖と天山山脈にはさまれた標高800mの盆地にあり、昔より有名なsilk roadの天山北路の上にあると云った方がわかりやすいであろう。そこでsilk roadについての本などをバラ

バラめくってみると、アルマアタはその昔天山北路の町Almatu(リンゴの町)として古くは、7世紀三蔵法師のsilk roadの旅行記「大唐西域記」の中に、また13世紀イタリーの有名なマルコポーロの旅行記の中にも記されていると云う。その後多くの興亡を経て19世紀の中葉ソ連の軍事基地となり現在の市に発展したと云う。

新潟より発ったアエロ・フロートは日本海を越えて約2時間でハバロフスクに到着しここで1泊。翌日の昼頃そこを発ち、満席のイルーシン62は一路アルマアタに向った。途中チタ、バイカル湖のほとりの美しい町イルクーツク、学園都市ノボシビルスクと西進し、そこより南下して約3時間ようやくアルマアタに着いたのは、ハバロフスクを発ってより11時間後であった。ノボシビルスクまでは森や平野の変化の少ない広大な土地の上空を飛行していたが、アルマアタに近づくに従い緑のない赤茶けた低い山脈が見え、やがてその中に巨大な白い山並みが夕暮

れの中にそびえたっているのが見え始めた。これが天山山脈（正確にはその支脈）であった。

飛行機から降り、カザフ・アカデミーの有機触媒及び電気化学研究所長で今回のセミナーの主催者であるSkolovsky教授らに迎えられ、美しい東洋風の女性たちから花束を受取った。「この女性が着物を着ると日本人とそっくりでしょう」とSokolovsky教授が冗談を云われた如く、この女性は日本人だと云ってもわからないくらいよく似た人も多い。カザフは100部族以上の集まりであると云われているが東洋系の人々が多数いるように見えた。

7月のアルマアタの日中は30~35℃と暑い雨が少なく湿度が低いため極めてさわやかであり、夜は又涼しい。（冬は零下20℃になることもあるが比較的暖かいとのことである）。日本でいえば丁度札幌の位置に相当し共通点も多い。南には五千米級のザイリスキー・アラタラ山脈（天山山脈の支脈）には万年雪がまぶしく光り、町の中心部の街路は正確な格子状をした近代的な町であり旧silk roadの両側には大きいニレの木が茂り、森や緑の多い美しい町であった。市の中央部にある「緑の丘」からのネオンに輝く夜影も又すばらしい眺めであった。Alma（リンゴ）Ata（父）と云う如く、郊外には多くの野生のリンゴの木があったそうであるが、最近では新種の大きいリンゴが栽培されており、他の果物も豊富で丁度サクランボのシーズンで方々でごちそうになった。アルマアタのみでなくこのカザフ共和国はソ連の中でも最も豊かな地方に属し、石炭・石油を始め種々の鉱産物の資源や農産物も豊富でまた機械工業が盛んな（日本にも技術輸出したとか）工業国でもある。道を行く人々も日本で見かけるような最新の流行のスタイルで、特に女性はおしゃれで、これが革命前までベールで顔を覆っていたとは思えないくらいで、極めて近代的な町であった。

快晴の翌日には、バスにて郊外の東方数十kmにあるイシク湖に向った。途中五千年前の古墳群（この中より2年位前に金で覆われた16才くらいの女性のミイラが発掘されて話題になったそうである。養蜂しているところなどを見ながら川沿いに山を登って行った。イシク湖は標高約千六百メートルのところにあり、周囲2~3kmの小さい湖で水深100mと澄んだ水で有名であったと云う。アルマアタ地方のresort spotであり、周囲は天山杉の茂った山が迫り、その間より雪の残る天山山脈が眺まれるすばらしい景

色のところである。数年前の七月の日曜日、多くの人が湖上でボートに乗り浜辺で水遊びをしていた時、突然、天山山脈の氷雪がなだれとなって数km以上離れた湖中に落下し、一瞬のうちに80数名の命を奪い、湖水はあふれて、湖口にあった水力発電所を破壊し川の兩岸をけずり取ってしまう悲劇が起ったと云う。今は小さい湖となり子供達が水遊びをしていた。このような氷雪のなだれはこの地方では珍しいものではなく大陸性気候のため夏期、突然40℃くらいに気温が上昇するときに起きると云う話である。市の南にあるMedeoというスケートリンク（世界選手権が行われて有名）に行く途中には雪崩れ止めの鉄柵などが谷間の各所に見られ珍らしかった。

アルマアタはカザフ共和国中の科学学術の中心で多数の大学研究所がある。Skolovsky教授が所長であるカザフ科学アカデミーの有機触媒及び電気化学研究所を訪れた。研究者百名ほどの小じんまりした研究所であるが、その75%が女性科学者であるという。飛行場で花束をくれた女性達も全てこの研究所の科学者であった。Skolovsky教授は「何故女性の研究者が日本から来なかったか」と云う質問もここでは容易に理解出来た。所長は労働英雄で研究のみならずカザフ共和国の重要な地位にあると云う。研究所の主な仕事は固体表面の電位状態と触媒活性との関係を自ら開発した装置を用いて実験を進めており、応用面でも重要な発見をされたと聞く。ソ連の触媒研究所はノボシビルスクに大きいものがあり、先年そこを訪れた時にも感じたことであるが、一つはソ連には会社の研究所がない為に日本では会社で行っているような応用研究もこのような研究所で行っていることである。また所長は絶対の権力を持っており、その指導のもとにほとんど全ての研究者が同じ分野で系統的に研究を進めている。従ってその分野では立派な総合的な研究が生れる。しかし技術進歩の早い時代には、ともすると旧態然たる研究を続けることにもなりかねない。またこの様なシステムでは、若い人々の個性的な研究をどのようにして伸ばすかは、大きな問題であるように思われた。

セミナーは、朝9時から夕方6時まで三日間、町の公民館で行われた。予定されたソ連の有力な科学者が不参加だったりして必ずしも盛上ったものではなかったが、数十人が参加してロシア語、英語を用いて「触媒研究への新しいアプローチ」と云うテーマで熱心に討論を行った。

セミナーが終ると、夜は日本へ来たことがあると云う研究所の人の自宅へ招待されてごちそうになったり（モスクワなどでは考えられないことだが）、東独から来たジャズバンドのコンサートを音楽堂へ（ドレスアップした人々ばかりであった）、又ソ連に二校しかないと云う女子大学の学生のカザフ民謡コンサートに、カザフの伝統の芝居（カザフ語のためロシア語の通訳つき）にと、毎夜休まないスケジ

ュールでいささか疲れたが、組織委員長の心からの歓迎ぶりに大いに感謝した。特に研究所の人々のつききりの親切な案内と、通訳としてノボシビルスクから来られたOlga Florovaさんの上手な日本語などは忘れられない。五日間の滞在であったが、多くの想い出を残し、多数の友人に送られて東京までの20時間余の帰途についた。

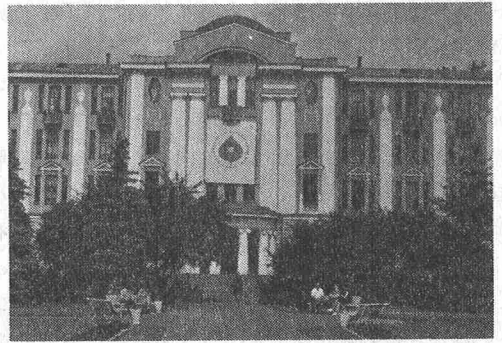
## 第12回国際植物学会に出席して

大 橋 広 好 （植物）

国際植物学会 はほぼ5年おきに開かれており、前回はシアトルで1969年に行われ4493人の出席者があった。今回の第12回はレニングラードで7月3日から10日に開催され、出席者は5000人を越えたといわれている。次回はシドニーで1981年8月と決ったが、東京と予想し期待していた人も多く、いずれ日本でも開かれることと思われる。今回の出席者はソ連、合衆国、フランス、西ドイツ、日本の順に多く、タイ、北ベトナムからも参加していたが、中国、台湾、韓国などからの出席者はなかった。

私は3月末からロンドンに滞在していたが、6月30日から開かれた国際植物命名規約会議にも出席するため、同日レニングラードに到着した。この命名規約会議は植物分類学者の国際連合が主催する植物の学名に関する唯一の国際会議で、今日では国際植物学会の一つの部会として開かれている。ここではすべての植物の学名に適用されている国際植物命名規約が討議され、そのいかなる変更もこの会議で承認されなければ有効とされない。この命名規約会議は1864年の第1回から20回迄は国際植物学会と呼ばれ植物名を国際的に統一するための会議であった。第21回1900年からは新たに発展してきた植物学の他分野も加わり、今日の意味での植物学会となったので、これを改めて第1回の国際植物学会とした歴史がある。

7月3日の開会式は市のコンサートホールで行われ、慣例の式次第の後、レニングラード音楽アカデミーによって有名なバレエのダイジェストが10曲ほど披露された。ソ連側は今回の学会に非常に熱を入れていたが、この開会式は特に好評であった。4日からの会議は18の部会に分れて行われた。特に目立



ハーバリウム（コマロフ植物研究所標本館）



ドジャンベ・アンツオーブ谷 (Anzob)

ったのは「植物界の保存」に関するテーマで、固有種の保護、自然植生の復元、種の保存に関する植物園の役割などが討議された。人類の生存にかかわる問題として植物界の保存と保護に対する参加者の関心は非常に強く、これが今回の学会の統一シンポジウムに取り上げられたばかりでなく、決議の主題としても採択された。この決議は全文18条からなり、多くの人々に読んでいただきたいと思うが、最初の



3条の要旨だけを以下に紹介したい。

1. 人類が将来も生存できるためには、自然保護の原則と地球上の動植物の種の保存とに矛盾せず、現在の食料の生産とその配分・貯蔵が行われるよう、すべての国民と政府に至急訴えたい。

2. 人類の食料はすべて植物界に由来するが、地球のフロラに関する知識は不完全であり、有用である可能性をもつ種も絶滅の危険にさらされているものが多い。この問題を扱える植物分類学者の養成とこの研究の援助に力を入れるより訴える。

3. 人類によって生態系が破壊され、多くの種が失われ、人工の荒地が増加している事実から、自然の生態系の変化およびその保護と回復の方法について更に研究を進展させる必要のあることを訴える。

植物学界の保存に関する話題の折に日本は自然の豊かな例としても公害の例としても挙げられることが多く、よく注目されていたことを報告しておきたい。しかしその日本では自然の豊かさを、現在目立って失われつつあるが、日本人自身がよく知らないし、これを次の世代に教える教育も殆んどなされていないように思われる。

レニングラードでの学会が終り、7月11日からは

タジック共和国でパミール高原の植物をみるエクスカージョンに参加した。ソ連では従来外国の分類学者の採集や調査にたいしてなかば鎖国状態が続いており、このヒマラヤ西端の地域の植物は日本には標本もないという有様であった。また我々の研究室では1960年以来日本とヒマラヤ両地域の植物の分類学的関連について研究を続けているので、西ヒマラヤの植物をみるよい機会でもあった。4日間首都ドシャンベ周辺900から3200mにわたっていくつかの植生を観察した印象ではこの植物と東ヒマラヤや日本の植物との共通性は殆んどみられなかった。ドシャンベ周辺では最高気温40℃、最低-30℃、降水は冬から春に集中するため植物の生育を左右するのは夏の乾期における乾燥の程度で、これは湿潤な東ヒマラヤの植物の生育条件とは非常に異なっている。ほぼ100種ほど標本を持ち帰れたので詳しく調べてみるつもりでいる。またタジック共和国植物研究所と標本交換の約束ができたので将来の研究を楽しみにしている。エクスカージョンの最後には2日間のモスクワ見物が含まれており、羽田に帰ったのは7月21日であった。

## 第13回太平洋学術会議に出席して

米 倉 伸 之 (地理)

表記の会議が本年8月18日～8月29日の二週間、カナダ国ヴァンクーバー市のブリティッシュ・コロンビア大学で開催された。この会議は、太平洋学術協会の主催により、太平洋地域に関連する諸問題の科学的研究における協力推進を目的として、太平洋地域の46ヶ国が正式メンバーとなっている。1920年にホノルルで第1回会議が開催されて以来、戦前に6回、戦後は3～5年おきに開かれている。1966年には東京で本学(本郷)を会場として第11回会議が12部門の分野で約2000名規模で開かれた。1971年の第12回会議(オーストラリア国キャンベラ市)から規模が縮小され、今回の参加者数は約800～1000名規模と聞いている。

今年は、「太平洋地域における人類の未来」を主テーマとし、1. 人口問題、2. 水産資源、3. エネルギー資源、4. 土地資源、5. 食糧資源、6. 科学と科学政策、7. 太平洋地域における人類

の未来の条件の7つのサブテーマでシンポジウムが開かれた。そのほかに、各分野の科学委員会ごとにシンポジウムがもたれた。

2週間の会期のうち、第1日は開会式および会長講演、第2～第5、第8～第9日の平日の午前のはじめに、サブテーマひとつずつをとりあげて基調報告がなされ、ひきつづき、分科会ごとにシンポジウム、一般発表があり、夜は、公開講演、常置委員会の会議などが開かれるという形式で行われた。中間の第6～7日の週末には、ヴァンクーバー周辺への見学旅行が行われた。

筆者は会期前半の第1週だけ参加し、固体地球科学のシンポジウムで発表をし、土地資源のシンポジウム、地理学分科会などにも出席した。今回の会議は、東京大会にくらべ規模が小さくなったためか、やや熱っぽさに欠けていたように感じた。また、会場であるブリティッシュ・コロンビア大学の構内が広

大で、発表会場が分散していたこと、第一週は天候不順で小雨が降りつづいたことなど影響していたのかもしれない。会議は、比較的小人数で手際よく運営されており、発表会場によっては、スライド映写が完全に自動化されて、発表者自身で制御できるようになっており、日本の学会でみるスライド係というような人が会場にいないこともあった。

固体地球科学のシンポジウムは、会議全体のテーマとはかなり独立して、GDP（国際地球ダイナミクス計画）の西太平洋、東太平洋地域の作業グループおよび環太平洋火成活動計画のグループによる討論会だった。第1日の西太平洋地域の報告では、日本人の発表が中心で、GDPの日本列島島弧班の総合報告、海溝に近い地域の地殻変動、海底地震計などについて報告された。

また最近アメリカ合衆国地質調査所で編集された中国大陸を中心とする東アジアの地質構造図（断層や褶曲などの分布図）が紹介され注目された。第2日は、東太平洋地域について、アメリカ・カナダの研究者を中心として発表があった。中南米からの参加者が少なくメキシコの地球物理学者の発表がひとつだけなのは残念だった。第3日は火成活動の年代測定・時代対比に関する報告があり、中央アンデスの深成活動の中心が約1億8千年以前から現在まで、100万年で1km位のほぼ一様なはやさで南米大陸の西端から東へ移動しているという発表などが注目された。第4日は一般発表と総合討論が行われ、海溝

斜面の断層モデル（海溝の陸側斜面には陸側に傾く逆断層が何本も発達しているというモデル）や前述の火山帯の移動などが議論の中心となった。

土地資源のシンポジウムでは、土地利用の生態学的な研究や、衛星写真による土地資源の解析方法の開発など、最近注目をあびている分野からの報告が多かった。またカナダの土地総局の作成した植生・土壌・気候・土地利用などの土地資源に関連した地図類が展示されており、関心を集めていた。

いくつかの分野のシンポジウム、分科会が平行的に開かれており、筆者が主に会議本来のテーマから独立的な固体地球科学のシンポジウムに出席していて、全体の動きを充分にはつかんでいないので、本会議が目的としていた「太平洋地域における人類の未来」についてどのような結論あるいは方向づけがなされたかについては充分な見解をのべることができない。

ヴァンクーバー市は、青い海にのぞみ、森林におおわれた山々を背後にした美しい街だと聞いていたが、あいにくの曇天・小雨の一週間で残念だった。週末の小旅行の午後に、やっと太陽と青空に恵まれ、その美しさを垣間見た。プリティッシュ・コロンビア大学の構内の広さ、芝生と林、近代的な建築と教場の設備の良さは、カナダでも一流とされており、研究・教育に専心するのに、うらやましいほどの環境である。

## いけばなの歴史

青山 惇彦（植物）

理学部二号館植物に古流いけばなサークルがありますので、いけばなの歴史を調べてみました。

西暦754年（奈良時代）に大伴宿弥家持が、山吹と壺で眺めながら飲酒した。これが日本最古のいけばなとされている。

1113年（平安時代）に仏前供花のことが記されています。仏教信仰が上流貴族に受けいられてきたのと並行して、仏前の供花を瓶子や壺、皿などに水を入れた中に挿して献ずることが一般化した。花摘はなつみ道心とか花衆はなむねとかいわゆる僧侶が指定されるのは、もっと後のことであるが、とにかく寺僧の勤めとしては、この花の献供という作法があった。そして仏

の花とよばれるシキミや、本来仏教に縁の深い蓮の花などを、水をいれた物に挿し供えることが行なわれるようになった。ただ花を自然のままに仏前に横たえておくとか投げ出ししておくのではなく、これを生かすように用意をもって供花となった。平安朝から中世にかけて、京の高雄たかおの神護寺で催される法華会の第5日、桜の枝に挿物はなつみをつけて男女が多数、この山に登っていった。仏教行事と花との関係はほかにも、念仏による極楽往生を祈念する傾向が強まっていた間に、多様になっていった。その仏前供花の思想伝統が、中世には立花の花道を生み出す契機ともなる。公家女房たちには花は、日常の話題とし





て頻繁にのぼるようになり、人生を花にたとえたりして遊んだりすることもあった。

中国の宋代には花卉園芸が著しい発達を示したが、その影響は平安末期の公家生活に及んだ。園芸を楽しむ中で、品種の多様化をはかるとともに、花を草木とあわせて手折ったとき、それぞれの花の美しさとどめず、枝葉を全体に美しくすることを求めるようになった。そうすることによって面として、立体として、周囲に調和させる中で美しく造型することまで現われてきた。

南北朝から室町時代にかけては、戦国の世に代表されるように、公武の人びとは互いに疑心暗鬼で人を見るようになったが、個人の實力に自信のないものは、他の仲間にする必要があった。そこで平素の協同性を確認し合える機会として、茶の湯や連歌、能楽鑑賞など、種々の寄合が、公家、武家の間で度々開かれたものである。こうした寄合の流行の中で、花会という催しも流行した。この頃になると花瓶に込められた花の草木を挿し立てたもの

のようである。

1418年（室町時代）日本最初の插花家である立阿弥の名前があります。当時将軍家は、花会の季節だった七夕はもとより、2月は紅梅、水仙、5月は夏

菊、立秋には仙翁花というふうに季節の草花が諸家から進上され、それがさらに禁裏へ贈られるというのが、年中行事となっていた。それらの花を将軍家では同朋衆がいて殿中の飾りとした。その役を立阿弥がした。この時代に座敷飾りを法式化した、芸阿弥も出た。この法式は今日でも伝統花がいきづいているのと同じに座敷飾りも生かされている。

「なげいれ」のいけばなが最初に見られる文献は、室町期のいけばなの秋伝を編集した「文阿弥花伝書」に、「なげいれ花と云事はふねのはなの事つむなり口伝」とある。なげいれが茶の湯の愛好者に好まれ、茶の席に飾られるようになった時代がある。1572年から1590年までの茶会の日記「津田宗及日記」に、季節の草木や花を「御馳走とし」て「いれ」とある。利休による茶の湯の大成の中で、位置づけられた茶の湯のなげいれ（茶花）は小間の茶室における象徴としていちづけられた。元禄年間には、紀の国屋文左衛門に代表される巨万の利益を得た新興町人達は、伝統の重みを感じない自由人達でもあって、彼らの日常生活の奢侈とあいまって広がっていった。

1529年には現存する日本最古の花伝書「宗清花伝書」が書かれた。著者は不明。

自然の草木を手折り、瓶などに「たてる」という思考とその所作は、この世に「たて花」といういけばなを咲かせた。「たて花」が全盛をきわめた時代は、1492年から1952年（室町時代）である。「たて花」が7、80年を経て後に「立花」として変わったと思われまふ。「たて花」が「立花」と呼ばれるようになったのはいつであるかわかりませんが、江戸初期1683年に刊行された「立花大全」があるのでこの頃と思われる。1542年に池坊専応が相伝した「花伝書」にもほぼ「立花」と思われることが書かれている。1594年から1800年（安土桃山から江戸中頃まで）は立花の全盛時代である。

1769年に古流初代・一志軒宗普が古流を創始した。1803年古流三世家元・関本理遊によって、古流「生花」（池坊の立花と同義語）が大成された。

明治維新によって政治行政機構の大変革によって多くの伝統的な文化遺産を失ったが、いけばなもまったく見捨てられた存在であった。

江戸で最大の流派として盛名のあった古流四世家元・関本理翁は「日々の生活の儀、殆ど当惑つかまつり候」と金沢の古流会頭近藤理清に援助をもとめた手紙を出している。古流は加賀藩の庇護をうけ、江戸と金沢に勢力を張っていたので、流そのものを

金沢に移すことで存続したが、江戸に本拠をかまえていたほとんどの流派は、その時期に中断または断絶してしまった。

明治の文明開化が始まる初年から、20年間はいけばな界にとって最悪の時期であった。しかも欧化政策によって、伝統的な立花はその主流の座を保つことができず、いけばなは沈滞期におちいった。しかし20年代から30年代にかけての明治政府の文教政策が国粹的な方向へと変革したので、伝統的な立花が再び陽の暈を見始めた。

やがて30年代に至って、西洋草花を花材とした盛もり花ばなが登場する。このことは明治の欧化政策による生活様式の西洋化は、いけばなを飾る空間を、床の間からテーブルの上などへと拡大させていった。この頃の盛花の創始は小原雲心によってなされたものだが、一般にその創始は、洋風建築の卓上におかれる水盤に色美しい西洋花卉を挿したことに始まるとされていた。

大正年間には、盛花は大衆の中に浸透し、大衆雑誌等によって、急速に広がっていったが、昭和初年にかけて自由花の運動が提唱された。自由花の運動

は立花という伝統的ないけばなに対してだけでなく、形式化におちいろうとする盛花に対しての警鐘でもあった。西洋草花を用いた新しい手法は単なる色彩的洋花の組み合わせを超えて、なげいれの中から自由さを、洋花の姿の中から日本人の情緒を汲み取ろうとした自由花の運動は現代のいけばなまでその影響が及んでいる。

近代いけばなの新しい芸術運動が自由花運動の延長として始まるかに見えたが、戦争によって中断され、近代いけばなが前衛という名のもとに出現したのは戦後であった。

終りに私達のいけばなサークルを紹介したいと思います。発足以来、今年で10年になります。始めは5人ほどの人数でしたが、現在15人の人達が稽古にきています。メンバーは植物、動物、化学の各教室と中央事務に勤務するうら若き？女性の人達です。この10年間五月祭でいけばなで数回参加し、対外活動も活発に行なわれています。特にこの2、3年間は著しい活躍である。これからも皆さんと共に楽しいサークルを目ざして努力したいと思います。

### 私の読んだ本 (23)

B.E. ノルティンク著、大鹿・金野訳

「研究人間 — 創造的科学技术者への道 —」(共立出版, 1975)

B.E. ノルティンク著、大鹿・住吉訳

「続研究人間 — 科学技术者の創造性を生かす道 —」(同上)

和田 昭 允 (物理)

この二、三年、本屋の店頭でよく“……に成功する法”、“……のコツ”あるいは、“How to ……”などという表題をみかける。これらの本が、大衆向き、サラリーマン向き、もしくは経営者向きにかかれた一種の処世術であるという分類に立てば、ここに紹介する本書は、研究者、とくに経営者的研究者たらんとする人に向けて書かれたものである。これは、すこしうがち過ぎた見方かも知れないけれども、副題の「創造的科学技术者への道」からいっても、まあ、当然といえども遠からずといえよう。ただし、研究者・技術者の処世(処研究?)の教科書として見るか、あるいは彼らの生態学として読むかは読者の自由である。

紙面が少いので、目次から抜き書きして見ると、章立ては、「何を」、「どこで」、「いつ」、「誰が」、「いかにして」、「なぜ」研究するかというようになっている。たとえば、第3章には、“ひとつのポストにどれ位いればよいか”という節があり、その中に下に示すような図が出ている。いろいろと思ひ当ることのある図だが、新しいアイデアに対する柔軟性が、自分の年令あたりで急降下しているのを見るのはイヤな感じのするものである。理学部教授会の平均年令はどの辺になるのだろうか。しかし、例外ということもあるに違いない。

さて、続編の方では、研究者の生態観察という要素がさらに強くなっており、章は、「科学者という

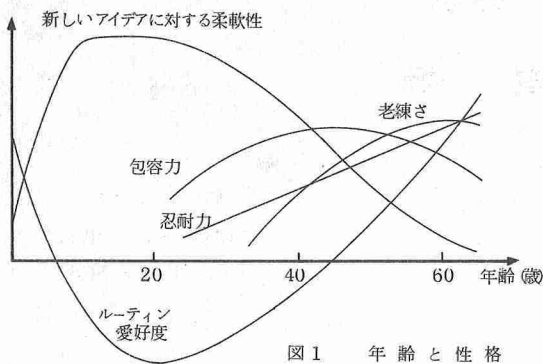


図1 年齢と性格

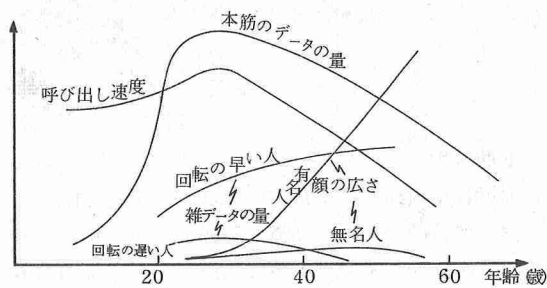


図2 年齢と記憶

種族」「研究所の解剖学」「研究所の生理学」「上級研究者」「下級研究者」「研究所の戦略」「研究所の倫理学」などである。

傑作なのは、最後の章に「正直と馬鹿正直」「嫉妬」「謙譲」などについて説かれていることである。

全体としてまじめな本であり、参考になることや耳の痛いこともいろいろと書かれている。しかし、だんだん読んでいくうちに、私自身は初めに書いた

ふたつのうちの、生態学として受けとる方になって来た。これは、「株で儲る法」を読んで大金持になれる筈はないと思いついておられるせいかもしれない。このような意味からいっても、若手向きというよりは、むしろ定年後に大学長、研究所長、企業の研究担当重役になられる方、あるいははなろうとしておられる方々の一読をおすすめする。

<学部消息>

7月理学部会合日誌

7月2日(水)	会計委員会	10.00~12.00
" " "	主任会議	2.00~ 3.15
" 8日(火)	会計委員会	10.00~12.00
" 12日(土)	教務委員会	10.00~12.00
" 14日(月)	理系委員会	2.00~ 4.00
" 16日(水)	教授会	2.00~ 4.00
" 21日(月)	理職定例交渉	12.30~ 1.50

9月理学部会合日誌

9月10日(水)	会計委員会	10.00~12.00
" " "	教務委員会	1.30~ 4.00
" 17日(水)	教授会	1.30~ 3.00
" 22日(月)	人事委員会	10.30~12.00
" 29日(月)	理系委員会	2.00~

教授会メモ

7月16日(水)定例教授会

理学部4号館 1320

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 会計委員会報告(佐々木)  
昭和50年度校費予算配分書案が承認された。
4. 教務委員会報告(朽津)
5. 寄附について
6. 教育実習について(竹内)
7. 共通1次大学入試について(岩堀)

教授会メモ

9月17日(水)定例教授会

理学部4号館 1320

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動等の報告
3. 評議員の改選  
田丸教授に決定。
4. 会計委員会報告(佐々木)
5. 教務委員会報告(朽津)  
かねてから入試改革問題について大学本部から諮問のあった諸点に対する理学部の解答が紹介された。

## 人 事 異 動

### 〔 助 手 〕

教室	官職	氏 名	発令年月日	異 動 内 容	備 考
物 理	助 手	上 原 喜代治	50. 8. 24	復 職	休職期間50.7.1~50.8.23
化 学	助 手	竹 田 満洲雄	50. 9. 1	復 職	" 48.12.1~50.8.31
地 質	助 手	清 水 孚 道	50. 8. 31	退 職	
植 物		井 上 康 則	50. 9. 1	助手に採用	
植 物		原 山 重 明	50. 9. 1	助手に採用	
生 化	助 手	長谷川 政 美	50.10. 1	転 任	統計数理研究所
化 学	助 手	石 塚 英 弘	50.10. 1	転 任	国文学研究資料館
天 文	助 手	吉 村 宏 和	50. 9. 6	復 職	休職期間50.8.15~50.9.5
植 物	助 手	磯 野 克 己	50. 7. 31	退 職	

### 〔 講 師 以 上 〕

教室	官職	氏 名	発令年月日	異 動 内 容	備 考
化 学	助 教 授	馬 淵 久 夫	50.10. 1	東京国立文化財研究所研究室長に 転任	
物 理	講 師	蟻 川 達 男	50.10. 1	東京農工大学助教授に昇任	
植 物 園	助 教 授	古 沢 潔 夫	50. 8. 1	教育職(一)1等級(東京大学教授理 学部附属植物園)に昇任させる	
生 化	総 理 府 技 官	溝 淵 潔	50. 9. 1	文部教官教育職(一)2等級(東京大 学助教授理学部)に転任させる	

## 外 国 人 客 員 研 究 員

教室	国 籍	氏 名	現 職	研 究 期 間
物 理	フランス	Jean Marc Jallon	CNRS細胞遺伝センター研究員 (堀田)	50. 9. 20 ~ 51. 9. 19
地 物	イギリス	Derek York	トロント大学教授	51. 1. 1 ~ 51. 6. 30
数 学	ブラジル	Mauricio M. Peixoto	ブラジル純粋応用数学研究所副所長	50.11. 1 ~ 50.12. 31
地 理	イギリス	G. Parry Jones	ウエールズ大学教授	50. 9. 10 ~ 50.11. 10
物 理	西ドイツ	H. A. Weidenmüller	ハイデルベルグ大学特別教授	50. 9. 28 ~ 50.11. 30
物 理	カナダ	Erich W. Vogt	ブリティッシュ・コロンビア大学教授	50.11. 1 ~ 50.12. 15

## 7 月 海 外 渡 航 者

所属	官職	氏 名	渡 航 先 国	渡 航 期 間	渡 航 目 的
物 理	教 授	桑 原 五 郎	アメリカ合衆国	7. 1 ~ 8. 19	グラフィットの電子的物性の研究
"	"	吉 川 庄 一	ソビエト連邦共 和 国	7. 3 ~ 7. 13	大トカマク実験のための委員会出席
地 質	"	飯 島 東	フ ラ ン ス	7. 4 ~ 7. 26	第 9 回 国際堆積学会議出席及び研究連絡

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	教授	黒田晴雄	カナダ フランス	7.6~7.26	ESCA36 使用者会議及び有機固体国際会議出席及び研究連絡
"	"	島内武彦	フランス	7.9~7.16	CODATA 執行委員会出席
地物研	"	等松隆夫	アメリカ合衆国	7.12~9.5	地球物理学の研究
物理	"	吉川庄一	アメリカ合衆国	7.21~12.31	プラズマの閉じ込めの研究
人類	"	渡辺直経	インドネシア	7.24~8.3	ジャワ化石人類遺跡調査に関する研究連絡
地球	"	浅田敏	アメリカ合衆国	7.26~8.26	メンドシーノ岬沖における海底地震観測 サイスミンティの精密な調査
物理	"	佐々木 亘	アメリカ合衆国 フィンランド	7.27~9.24	第14回国際低温物理学会議出席及び著名科学者交流プログラム参加
"	"	有馬朗人	オランダ 連合王国	7.30~9.3	大きな殻模型国際会議出席及び研究連絡
地球	助教授	河野 長	インド, マダガスカル, ザイール, ウガンダ, タンザニア	7.1~8.17	マダガスカル・東アフリカ地学総合調査
物理	"	清水忠雄	アメリカ合衆国	7.13~8.1	ゴードン会議「原子物理学の新しい方向」 及び電子・原子衝突国際会議出席並びに研究連絡
人類	"	尾本恵市	フィリピン	7.16~7.25	蛋白多型から見た太平洋地域人類集団の遺伝的多様性の研究実施
化学	講師	秋葉欣哉	ユーゴスラビア ドイツ連邦共和国	7.10~7.27	第5回複素環化学国際会議出席及び研究連絡
地球	助手	兼岡一郎	マダガスカル	7.5~8.17	マダガスカル・東アフリカ地学総合調査
"	"	高野 敬	アメリカ合衆国	7.26~8.17	メンドシーノ岬沖における海底地震観測 サイスミンティの精密な調査

### 8月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	教授	朽津耕三	連合王国 オランダ デンマーク ドイツ連邦共和国	8.1~8.28	第10回国際結晶学連合総会会議出席及び研究連絡
物理	"	和田昭允	デンマーク 連合王国 フランス	8.1~8.17	第5回国際生物物理学会出席及び研究連絡
化学	"	田丸謙二	中華人民共和国	8.4~8.19	解媒技術に関する技術交流
臨海	"	小林英司	連合王国 ドイツ連邦共和国	8.6~8.24	ヨーロッパ比較内分泌学会出席及び研究連絡
地物研	"	福島直	フランス ドイツ連邦共和国	8.19~9.13	第16回国際測地学地球物理学連合総会出席 及び研究連絡
物理	"	植物泰忠	アメリカ合衆国	8.20~9.6	準二次元系の電子論に関する国際会議, 表面伝導性の研究会出席及び研究連絡
化学	"	向山光昭	アメリカ合衆国	8.24~8.31	生物有機化学と酵素モデル本会議出席
地物研	"	小口高	カナダ	8.28~9.25	極光VLF自然電波及び地磁気脈動の共同研究
化学	"	斉藤信房	スペイン フランス	8.29~9.12	IUPAC第28回総会出席及び研究連絡
"	"	藤原鎮男	スペイン	8.29~9.13	IUPAC第28回総会出席



所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	助教授	池上 明	デンマーク 連合王国 フランス ドイツ連邦共和国	8. 1~8.17	第5回国際生物物理学会出席及び研究連絡
生化	"	田隅三生	デンマーク 連合王国	8. 1~8.17	同上
物理	"	小林俊一	フィンランド フランス	8. 9~8.31	第14回国際低温物理学会議出席及び研究連絡
地球	"	河野 長	フランス	8.23~9.13	第16回国際測地学地球物理学連合総会出席
物理	"	鈴木増雄	ハンガリー イタリヤ	8.23~9.25	統計力学国際会議出席及び研究連絡
地球	"	永田 豊	フランス	8.23~9. 9	第16回国際測地学地球物理学連合総会出席
化学	講師	奈良坂 紘一	アメリカ合衆国	8.17 ~51.8.16	有機合成化学の研究
地物研	"	佐藤 哲也	フランス ドイツ連邦共和国	8.19~9.16	第16回国際測地学地球物理学連合総会出席
物理	助手	伏見 讓	デンマーク フランス ドイツ連邦共和国	8. 1~8.17	第5回国際生物物理学会出席及び研究連絡
"	"	梶田 晃示	フランス フィンランド オランダ ハンガリー	8. 9~8.31	第14回国際低温物理学会議出席及び研究連絡
地理	"	米倉伸之	アメリカ合衆国 カナダ	8.18~9. 4	第13回太平洋学術会議出席及び研究連絡
物理	"	柴田 文明	ハンガリー ベルギー スイス ドイツ連邦共和国	8.19~9. 7	統計力学国際会議出席及び研究連絡
地球	"	水谷 仁	フランス	8.22~9.12	第16回国際測地学地球物理学連合総会出席
化学	"	岡崎 廉治	フランス ドイツ連邦共和国 ベルギー	8.29~9.16	光化学の合成的有様性に関するヨーロッパ 国際会議出席及び研究連絡

### 9月海外渡航者

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	教授	西島和彦	アメリカ合衆国	9. 4 ~51.1.25	素粒子論の研究
地質	"	久城育夫	フランス アメリカ合衆国	9. 6 ~51.3.31	パリ大学夏期学校出席及び研究連絡
物理	"	久保亮五	ドイツ連邦共和国	9.20~10.5	IUPAP第15回総会及び執行委員会出席及び研究連絡
天文	助教授	小平桂一	オーストリア ドイツ連邦共和国 オランダ	9. 6~9.31	天体物理学国際会議「A型特異星の物理」 出席及び研究連絡
物理	助手	天埜堯義	アメリカ合衆国	9.14 ~51.9.16	分子分光學, 特にレーザー分光學の研究

# 昭和51年度修士課程入学試験入学志願者数，受験者数，合格者数

50. 9. 29

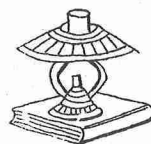
専門課程	文部省 定員	収容予 定人員	志願者数			受験者数			第1次合格者数			第2次合格者数		
			本学	他大学	計	本学	他大学	計	本学	他大学	計	本学	他大学	計
数 学	10	27	58	44	102	53	41	94	38	16	54	21	2	23
物 理 学	82	55	94	182	276	92	165	257	65	38	103	40	15	55
天 文 学	16	6	6	15	21	6	15	21	4	2	6	1		1
地球物理学	38	18	17	15	32	17	14	31	16	7	23	16	4	20
化 学	31	41	43	47	90	43	38	81	43	30	73	32	9	41
生物化学	15	22	21	36	57	21	30	51	19	13	32	13	3	16
動物学	12	9	9	8	17	9	8	17	9	6	15	8	1	9
植物学	10	12	9	9	18	8	9	17	8	8	16	4	2	6
人類学	4	5	3	3	6	3	2	5	3	2	5	1		1
地質学	11	14	4	7	11	4	7	11	4	3	7	4	3	7
鉱物学	2	4	4		4	4		4	4		4	4		4
地理学	7	8	8	3	11	8	3	11	8	3	11	6		6
相関理化学 科学史・ 科学基礎論	20	20	51	34	85	47	31	78	27	11	38	16	5	21
計	272	247	334	425	759	322	381	703	254	145	399	172	44	216

## 本学出身者の学部別志願者 受験者合格者数

学 部	志願者数	受験者数	第 一 次 合格者数	第 二 次 合格者数
理 学	254	247	208	150
教 養	52	50	28	16
工 学	21	20	14	5
農 学	3	3	1	
薬 学	2	1	1	
経 済	1	1	1	1
教 育	1	1	1	
計	334	323	254	172

## 2つの専門課程合格者

専 門 科 目	合格者数
化学・相関理化学	1 名
植物学・相関理化学	1 名
計	2 名



理学博士学位授与者

昭和50年7月14日付授与者

専門課程	氏名	論文題目
物理学	山崎 聞雄	気体の性質にもとづく分子間力の解析
化学	今橋 勇三	CIDNP Studies on the Thermolysis and photolysis of Methyl Diazoacetats in Ethers and Halides (エーテルおよび有機ハロゲン化合物中でのジアゾ酢酸メチルの熱分解および光分解反応のCIDNPによる研究)
生物化学	野村 晃司	コラゲナーゼの特異性
人類学	原田 勝二	Isozyme Variations in Human Tissues and Erythrocytes Examined by Electrophoresis and Isoelectrofocusing (電気泳動法並びに等電点分画法により検出されたヒト赤血球および各組織におけるアイソザイム変異)
学位規則 第3条2項該当	二谷 穎男	Studies on the Kuroshio (黒潮の研究)
同	竹内 光弘	Tangent coalgebras and hyperalgebras I, II (接コアルジェブラとハイパーアルジェブラ I, II)
同	中村 道治	Distributed-Feedback GaAs Lasers (分布帰還形GaAsレーザー)
同	小林 喜光	Radiation Effects on the Polymetaphosphates (ポリメタリン酸塩への放射線効果)
同	小島 日出夫	鉛およびその合金の塑性変形におよぼす超伝導遷移の影響
同	請井 一利	一次元的金属性化合物としての鉛フタロシアニンの研究 (Lead Phthalocyanine : A One-dimensional Metallic Compound)

昭和50年9月29日付授与者

専門課程	氏名	論文題目
動物学	常木 和日子	下等脊椎動物の視床下部-脳下垂体系の研究
学位規則 第3条2項該当	加地 紀臣男	On the $\epsilon$ -entropy of stable processes (安定過程のイプシロン・エントロピーについて)
同	窪川 義広	局所型エルゴード定理
同	松島 久	Developmental Studies on Plant Microbodies (植物ミクロボディの発生学的研究)
同	山岸 皓彦	Electron Transfer Reactions of Ion Radical, and Related Phenomena (イオンラジカルの電子移行反応と関連した現象)
同	津野 義道	On the prolongation of local holomorphic solutions of nonlinear partial differential equations (非線型偏微分方程式の局所正則解の延長について)
同	伊藤 菁我	炭化水素資化性細菌の糖脂質に関する研究
同	池田 幸雄	The Iritono igneous complex (入道野火成複合岩体)
同	山崎 篤磨	Close Binary Stars of W Ursae Majoris Type (大熊座W型近接連星)
同	木宮 一邦	花こう岩の風化引張強度指数(TSI)とその地質学的意義

## 昭和50年度科学研究費補助金配分内定一覧（第三次）

課題番号	課題品名	氏名	配分予定額	
			50年度 千円	51年度 千円
<b>一般 B</b>				
046029	数理解析における非線形問題	藤田 宏	1,800	0
<b>一般 C</b>				
054053	数理解析の位相解析的・数値解析的研究	伊藤 清三	1,020	0
054055	天体における磁場の形状と流体力学的構造	海野 和三郎	800	0
054064	岩石中の動電効果の測定	水谷 仁	900	0
<b>総合 A</b>				
034012	函数解析学の研究	伊藤 清三	1,400	0
034013	銀河系プラズマの研究	海野 和三郎	1,400	0
038007	生体膜としての光合成器官の特性と分子の存在状態	森田 茂広	2,990	0
<b>奨励 A</b>				
074068	ランタノイドイオンプローブ法による n-アルコール類の内 部回転異性の研究	稲垣 冬彦	290	0

### 編 集 後 記

夏休みの前後にひらかれた国際会議の興味あるレポートと、おくゆかしい生花の話で本号を編集してみました。御多忙中を寄稿された諸先生に御礼申し上げます。

最近「書評」欄がやや原稿不足で困っております。本文も含めて積極的な投稿を歓迎します。

追記) まさに最終版におろそうとしていたとき、江橋先生の文化勲章受賞のニュースがとびこみました。早速お祝の文をお寄せ頂いた植村部長の御厚志を深謝すると共に、編集委員会として本誌が三度びさわやかなニュースを理学部の皆様にお伝えすることができたことを喜んでおります。

#### 編集:

小堀 巖(地理) 理2号館 205号室 内線6449
木下清一郎(動物) 理2号館 22号室 内線3361
猪木慶治(物理) 理1号館 461号室 内線2668